

健康文化

## 見えなくなった「社会の臍」

鈴木 國文

いつごろからだろうか、これほどに社会の先行きが見えなくなったのは…。その昔、子供は「大きくなったらあんな生活がしたい」と考えて生き急いだり、「あんな生活をしなくちゃならない」と考えて過剰に身構えたり、ともかく「あんな生活」との距離を様々な仕方を感じ、日を送っていた。「あんな生活」というイメージが、子供の毎日を、その毎日の中に埋没させることなく、時の流れに乗せていたのだ。しかし、いまは、その「あんな生活」のイメージがどうも希薄だ。

なんだか、のっけからオジサンの繰言みたいになってしまったが、なにも昔を懐かしんで、いまを呪おうとしているわけではない。いまの青年が置かれた状況の、見た目以上の過酷さについて書いてみようと思うのだ。

就労問題を論ずる言葉に「転職の七五三」という表現がある。就労後3年以内の離職が、中卒で7割、高卒で5割、大卒で3割に達しようとしている現状を危ぶんで使われる言葉だ。現在、就職後の職場定着率は、これまでにないほど悪い状況になっている。また、「ひきこもり」という言葉が流布するようになってすでに10年以上になるが、就労年齢で教育も受けず、職にも就かず、近い友人関係も持てずに家庭に「ひきこもって」いる青年の数は、現在、50万とも100万とも言われている。社会の中に確かな「とっかかり」をもてないで、あたかも社会から剥がれ落ちるように、社会の中に居場所を見いだせないでいる青年が驚くほど多いのだ。これは、単に職業だけの問題ではない。大学に入学しながら大学に通えなくなってしまう青年も多い。社会とのつなぎ目、社会への「とっかかり」が見いだせないままに、多くの青年が道に迷い、足踏みをしているのだ。

厚労省によると、昨年度の日本人の平均結婚年齢は、男性29.6歳、女性28.9歳だという。30年ほどで女性の結婚年齢は4年ほど高くなった。今年の調査では、結婚の希望年齢は、男性33.1歳、女性31.5歳だという。初婚年齢の高年齢化も、結婚が最小の社会単位であることを考えれば、社会への参加に対する躊躇と言えるのかもしれない。

その昔、ヨーロッパの特権社会には社交界へのデビューという儀式があつて、

華やかなスポットライトが青年の「le monde（社交界・世界）」への第一歩を照らし出した。そして、青年は、そのスポットライトを不安と期待をもって受け止め、社会というものを体で明確に感じる機会としていた。こうした儀式は、近代社会が成立するにつれて、形を変え、特権階級だけでなく、広く青年一般へと広がったと言っているだろう。近代という仕組みができて以来、青年は、社会の前衛部分を支える核として認識され、社会全体がその意向に耳を傾け、これから来るべき社会の担い手として、大きな関心をもって迎えられるものとなった。そして、イニシエーションによって社会に参加していくという、あの不安とワクワクが青年期の基本的なトーンとなる。都市は青年の不安とワクワクの舞台となり、青年の過剰なエネルギーを吸収し続けてきた。しかし、いつからか、青年のこの特権的位置づけがあやしくなった。進歩の切っ先は鮮明にあるとしても、社会の前衛と後衛の区別は曖昧になった。ほとんどの人は、その個人の努力の多寡に関係なく、社会の変化に青息吐息で着いていく、ほうき星の尻尾のようなものになってしまったのである。

「ひきこもり」に関する論文や書籍の数がいつ頃から増え、どのように推移してきたかを調べたことがある。いまの意味での「ひきこもり」という概念が現れたのはおよそ1992年ごろで、1995年ごろからそれに関する論文、書籍が増加し、2001、2002年にピークに達している。この変化を情報産業におけるメディアの普及率と比較してみて、驚いてしまった。あまりによく重なるのである。携帯電話の普及は1993年からで1995、6、7年ころ急激に増加、その後2003年にピークに至る。インターネットの普及は、1995、6年ころからで、1999、2000、2001年頃が最も増加し、やはり2003年にピークである。「ひきこもり」に関する議論は、精神医学においても、マスコミにおいても、インターネットの普及率とほぼ同じカーブを描いて推移している。

コンピュータの普及、インターネットの一般化が今ひきおこしている社会基盤の変革は、その影響の大きさがほとんど予測できないほどの、未曾有の変革である。おそらく、15世紀半ばのグーテンベルクの活版印刷術の発明がその後世界に与えた影響以上の影響を数十年の間に引き起こす、そういう変革なのである。人類は、これほど急速な社会基盤の変化をこれまで経験したことはない。我々はいま、瞬時に手に入れることのできる情報量が、数年経てば10の何乗倍にもなる、そういう変化の中で暮らしている。

この情報メディアによる変革は、政治経済など我々の生活のあらゆる領域に同期する大きな変化をもたらした。冷戦構造の崩壊、日本経済の失速など、この10数年に我々が経験した大きな変化はいずれもメディアの変革が前提となっ

て起きた事柄だ。冷戦構造の崩壊について、西側の情報が衛星放送を通じ、東欧、そしてソビエト内部へと大幅に流れ込んだことが理由の一つとして挙げられているが、これもコンピュータの急速な発達がなければ起き得なかったことだ。日本経済の失速は、第V世代コンピュータの開発競争に日本が敗れたことが大きく影響している。そして、そのころから、世界の中でアメリカという国の占める意味が大きく変わってきたのだ。

こうした変化が世界を覆うに従って、社会の臍が見えなくなってきた。臍というのは、社会の向かっていく方向、社会が何を理想としているか、もっと言えば何を是としているかということをつかむための、手がかりのようなものである。それは個人と社会を結ぶ臍の緒の結節点でもある。何に従っていけば、確実に「社会」というものに結ばれるのか、そのことが、いま誰にも良く見えない。社会と自分とを結ぶ臍の緒が見えないのだ。とりわけこのことは一部の若い人たちにとって、とても苦しい状況をつくっている。

いま社会の中で最もわかりやすく、とらえやすいのは、消費という活動であろう。消費を誘うための情報は、避けても、避けても体にまとわりつくほどにあふれている。それに対して、生産への参加の糸口は実に見えにくい。社会における成功者のイメージも、いまでは消費活動の方がずっと先に見えてくる。その人が社会の中で何をし、何の「生産」にかかわってきた人なのかが見える前に、ただその人の消費スタイルだけが大きく取り沙汰される。生産に関わる努力は、「プロジェクト X」のように、いまやノスタルジックなメロディーに乗せられて、よき時代のイメージとしてしか伝えられない。いま、ああした生産活動への高まりは希薄だ。ほとんどのプロジェクトが、進歩を牽引するものではなく、どこへ向かうとも知れない変化に何とかついていこうとする苦しく、空しい努力になっているのである。

こうした社会を作ってしまったのは、確かに他ならぬ我々大人の世代であろう。そのことは、よくよく考えてみればわかる。しかし、この社会を作ってしまったのは自分たちの世代だという自覚を持ちにくいことが、また問題を複雑にしている。こうした社会について責任があるはずの我々の世代もまた、言ってみれば引きずりまわされるようにして、いまの活動に至っているからだ。おそらく、責任というものもまた、社会の臍との関係でしか、認識しがたいものなのであろう。

名古屋大学医学部教授・保健学科作業療法学専攻（精神科医）